

パネル

向の問い直しを試みた。

コメンテータを含めた当日の質疑応答では、脱ジェンダー化が必要かどうか、ポジショナリテイの複合性、ポジショナリテイを問われない権力側の無意識さ、男性のジェンダー的視点の欠如、男性によるジェンダー研究不足などをめぐって意見が飛び交った。

このパネルの目的はジェンダーの視点を特権化するものではないが、日本の宗教研究の現状では、この視点をいまだ強調しすぎて強調しすぎることはないのではないだろうか。

教祖伝の脱構築

代表者 幡鎌 一弘

コメンテータ・司会 堀内みどり

記憶・ナラティブ・教祖伝

宮 本 要 太 郎

教祖伝を構成する個々の出来事は、出来事として切り取られ、解釈され、再構成されることを通じて、初めて〈出来事〉として知覚される。また、エピソードを伝える人びとの記憶は、教祖伝という解釈の様式において表現されることによって共有されうる記憶、すなわち〈記憶〉となる。重要なのは、〈出来事〉と〈記憶〉の間の循環関係である。教祖伝は〈教祖〉（を構成するさまざまな出来事）を記憶するために叙述される。しかしいったん教祖伝が成立すると、それは出来事の解釈という行為を要求する。記憶された出来事（すなわち教祖伝を構成する一連のエピソード）と、出来事によって（再）解釈を促される記憶（エピソードの意味を探索すること）とは、教祖伝において循環しながら相互に補足し合いつつ、教祖についての一連のイメージを構成する（すなわち教祖像を形象化する）。この解釈学的循環においては、個々の出来事についての記憶が時間軸にそって構成されることによって、教祖伝の構築という新たな出来事が生じ、さらにその教祖伝が受容されること

で、この出来事の意味が共有される。教祖伝を読む者は、すでにその伝記の主人公が聖なる存在であり、その言行は人びとの救済を約束するものであることを知っている（記憶している）。それゆえにこそ、個々のエピソードの象徴的・救済論的な意味が解釈され、理解される。しかし、その人物が救済者であるという教祖伝の前提は、個々のエピソードを通して絶えず想起され、繰り返し確認されることによつてのみ保証されるのである。

教祖伝には教祖について語られたもの（物語）としての側面だけでなく、教祖について語ること（物語り行為）としての側面も含まれる。教祖伝において出来事と記憶の間に相互作用が成立するのは、それが物語り行為であるからにはかならない。物語るという行為には、過去を現在の時点から再構成すると同時に、また構成された過去によつて逆に現在が意味づけられるというように、解釈学的再構成が伴う。この物語り行為を通じて単に「教祖」が再構成されるのみならず、その「教祖」の眼差しに照り返されて物語的自己同一性も同時に構築される。教祖について語ること（教祖伝という行為）は、語る主体の信仰を解釈することと並行している。それは信仰の主体の生のヴィジョンの獲得でもある。

教祖伝は歴史的存在としての教団の信仰のあり方を再解釈するための契機としても働く。そのとき教祖伝は、個々人に生のヴィジョンを提供するとともに、その個人がおかれている歴史的状况を理解し、「歴史」を再構成するための解釈学的土壌となる。この点に、教祖についての「記憶」が歴史的出来事とし

ての教祖伝を相対化する可能性を見出すことができる。「教祖」を構築しようとする営みは、まさにその「教祖」によつて脱構築される。

教祖伝は、語り手と聞き手（読み手）を結びつけると同時に断絶も生み出す。それは、表象された「記憶」の共有可能性と、出来事が「出来事」となる過程で必然的に生じる解釈の歴史性との矛盾でもある。しかしこの矛盾は、人間の歴史性が解釈に開かれているという事実によつて創造的なものとなる。まさにこの創造性によつて教祖伝は、歴史を生きられうるものとする。この創造的行為において、教祖伝が描き出す教祖にまつわる出来事は、象徴的・救済論的な意味を付与される。付与するのは、個々の出来事の意味を解釈する共同体（「記憶」の担い手）である。しかし、その解釈の枠組みを提供するのは、当の教祖自身（「出来事」の担い手）である。教祖伝は、ある歴史的人物の救済論的な営みを記憶し続けることで現在化したという宗教的欲求から生み出されるが、そのようにして誕生した教祖伝は、今度は、それを読むものに対して、自らの信仰的生において教祖の行いを繰り返し想起し、その意味を解釈することを要求するのである。